

Gallerist's Album OFILINA

New History Beyond The 100th Anniversary of the Foundation

Matsumiya Nobuyuki (Owner of TORIIYA ART GALLERY)

This article introduces the history of TORIIYA ART GALLERY since its establishment to the present, today's activities of reopening after renovating the gallery in April 2023, and the future direction determined by the fourth representative.

私が4代目として、とりゐや美術店の主人になったのは7年前。3代目の父から継承して最初に考えたことは、"自分自身の色を出す"という事。とりゐや美術店は、初代から3代目まで日本人作家の日本画・洋画を扱う画廊であった。そして、父親(3代目)のもとで15年間、日本興味が海外作家にも向けられている事に気づき、自分の代では海外の作品を扱ってみたいと考えるようになった。

ここで、とりゐや美術店の歴史を 紹介しておきたい。

初代・松宮文明(1893~1977)が 大正期、大阪の天王寺区茶臼山に松 宮呉服店を創業。大正11年頃に松宮 呉服店美術部を創立し、本格的に美 術の世界に足を踏み入れた。富岡鉄 斎に深く傾倒し、また冨田渓仙との 深い付き合いから横山大観を紹介さ れるなど錚々たる面々との付き合い がはじまる。大観との出会いの後、 大観から呉服店と美術の両方ではな く美術だけを商いとするように提案 され、美術一本でやっていくきっか けになったと聞いている。その際に、 冨田渓仙より華表屋の屋号を頂いた。 それからは、大観の直接の出入り業 者として、毎月1点とりゐやのため に作品を描いて頂く事になり、大観 のもとへ足繁く通うようになった。 それは大観が亡くなるまでの35年間 の長きにわたる公私の付き合いの歴 史でもある。かくして、富岡鉄斎・ 横山大観といえばとりゐや美術店だ といわれるまでになった。



【図2】ギャラリー外観

松宮伸



【図1】華表屋看板

その間、父が3代目を受け継いだ タイミングで茶臼山から大阪・高麗 橋に拠点を移し現在に至る。そして、 とりゐや美術店の歴史も私の代で 100年を超えた。そんな中、2代 目・3代目は当店での展覧会を開か なくなっていたこともあり、もう1 度展覧会を定期的に催せるようにと 考え、2023年内装工事を行い、リニ ューアルオープンさせた。コンセプ トは"美術館の一角"。掛け軸から 海外作家の作品まで、ジャンルに拘 らず展示ができるイメージ通りの空 間を作ることが出来た。そしてリニ ユーアル後、第1回目の展覧会とし て日本画のイメージの強いとりゐや から自らの色を出すタイミングと位 置づけ、ピカソなどの海外作品を展 示するに至った。

ここで、リニューアルオープン後 の展覧会を紹介する。

2023年4月から5月にかけて「ピ カソのセラミックと外国作家版画 展しを開催。ピカソの作品の他、ブ ラック、マチス、シャガールの作品 を展示した。とりゐや美術店として は、ご存じの方々にとって驚きの展 示風景であったかも知れないが、大 方の��咤激励を頂き、次へとつなが る良いきっかけになったと思ってい る。

2023年10月には「能谷守一展」を 開催。能谷守一は、初代から扱って いる作家の1人であるが、展覧会と いう形で発表する事が1度もなく、 ここでまとまった形で展示できた事 は非常に心躍る出来事であった。

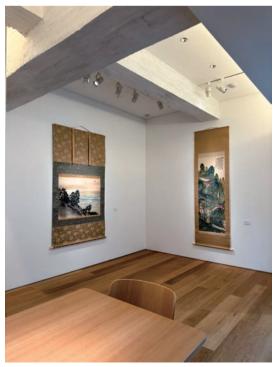
2024年4月には、「華表屋の展覧 会」を開催した。この展覧会は、と りゐや美術店がこれまで手掛けてき た作品を展示した。横山大観・富岡 鉄斎・冨田渓仙などの掛け軸を中心 に並べたもので、私自身も安心感の ある展覧会となった。まさしく、 「ザ・とりゐや」的な展覧会でもあ るため、今後も定期的に続けていき たいと思っている。

今年5月は「コレクション展」を 開催。出品作としては、ピエール・ スーラージュ、デヴィッド・ホック ニー、ジャスパー・ジョーンズ、サ ム・フランシスなど私が個人的に蒐 集してきたものが中心の展示となっ

このように、リニューアルオープ ン後、約1年間で4回の展覧会を開 催することが出来た。今後も、年3、 4回のペースで発表していこうと思 う。私にとっての伝統への拘りと、 新機軸への挑戦について、展覧会を 通して感じ取っていただければ幸い である。 (とりゐや美術店主人)



【図3】展示風景2023、「熊谷守一展」



【図4】展示風景2024、「華表屋の展覧会」大観、鉄斎

Curator's Album — OTIVIL

Tsuyoshi Hisakado's Solo Exhibition "Dear Future Person"

Fujita Mizuho

(Chief Curator/Program Director of Kyoto City University of Arts Art Gallery)

The article is a curator's report on Tsuyoshi Hisakado's solo exhibition "Dear Future Person," which was held as part of the Kyoto City University of Arts Relocation Commemorative Program. The curator's description of the exhibition and its background suggests that this exhibition will be the end of a nine-year story, but also the beginning of something new.



【図1】久門剛史《Quantize #3》(2015) 展示風景(「still moving」、元崇仁小学校、撮影:来田猛)

ひさかどつよ し

久門剛史 (1981-) は、京都市立 芸術大学の京都駅東部の崇仁地域へ の移転をテーマとした最初のプロ ジェクト「still moving」(2015年3 —5月、元崇仁小学校およびその周 辺) でインスタレーション作品 《Quantize #3》(2015)【図 1】を展 示した。校舎に眠るさまざまな記憶と時間を背景としてランダムに出現する、誰もが見聞きしたことのあるような現象が、鑑賞者自身の断片的な記憶と重なり合うことによって、固有の事物が開かれたものへと変容する感覚をもたらす作品である。以

後久門は、自然、地球、そして宇宙と人間との関係のあり方などをテーマに、プログラミングされた音や光などの現象と造形物とで構成する大規模なインスタレーション作品を国内外で精力的に発表してきた。

一方筆者は、2023年秋に新キャン パスへの移転が完了するまで、 「still moving」を含む移転に関連す るいくつかのプロジェクトに携わっ てきた。近い将来に訪れる移転が、 この地域に希望をもたらすものであ って欲しい。さまざまなことに悩み、 考え、試行錯誤を繰り返した。そし て、この「still moving」からはじ まった長い思索の旅に終止符を打つ、 新しいギャラリーの柿落としとなる 展覧会には、久門を再び招こうと計 画した。それはある意味で、あの教 室で刻まれていた時間を現在に繋ぎ なおし、明るい未来を展望するため の儀式でもあったのかもしれない。 筆者の申し出を快諾してくれた久門 は、展覧会のタイトルに「Dear Future Person, 」というフレーズ を選んだ。

建物を南北に横断する新しいギャ ラリーは天井が高く、うなぎの寝床





【図2-5】 久門剛史「Dear Future Person. | (2023-24) 展示風景 (京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA、撮影: 来田猛)

そして、展示空間の終わりには作 家自身によるステートメントが置か れている。新しいギャラリーの空間 を効率化された現代世界の縮図と捉えた久門は「この展示は、母校が私に教えてくれたことを軸とし、歴史への敬意と現状への怒りを出発点は、ステートメントを読んで作品の見え方が変わった、との声も多くまで出る。と語る。本場者からはえ方が変わった、それはあくまで出る。といれた。しかし、それはあくまで出発点だと捉えよう。《Quantize #3》がそうであったのと同じように、久門されている。それらは鑑賞者に読みをれている。それらは鑑賞者に読みをれている。それらは鑑賞者に読みをれている。であり、そこから個を超えた豊かな境地に接続できる可能性を秘めているのだ。

この大きな一つのインスタレーシ ョンには、大きな空間=自然または 地球、小さな存在=個人、区切られ た空間=個人をとりまく世界、とい う構図が幾重にも重ねられている。 繊細な素材でできたそれらはとても 微妙なバランスの上に保たれていて、 この世界のなかに確実に信じられる ものは決して多くないということを 意識させられる。けれども、そこに 漂うのは悲観的な空気ではない。積 み重ねられた日々のいとなみは、そ れらがいかに小さなものであったと しても、蓄積され、それぞれの「信 念が手を繋ぐとき | には何かの風穴 を開けることができるのだと久門の 作品は教えてくれる。無数の見えな い壁に取り囲まれたものたちを、少 しずつ丁寧に整えていくことで、や がて新しい何かを見つけることがで きるだろう。それは、きっと希望に 満ちたものになるはずだ。

(京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA チーフキュレーター/プログラムディレクター)

Dear Future Person,

藤田瑞穂

* 久門剛史「Dear Future Person, 」(きょうと視覚文化振興財団奨励展覧会)の詳細な記録を以下 URLにて公開しています。

https://gallery.kcua.ac.jp/archives/2023/10367/ 本展の開催に多大なるご協力をいただいたきょうと 視覚文化振興財団に心より御礼を申し上げます。







"Eyes" of Bugaku Dance Mask Saisoro

Ichimoto Takayuki (Curator of THE MUSEUM YAMATO BUNKAKAN)

A Bugaku mask *Saisōrō*, which represents an old man who searches for elixir of longevity, is characterized by its white of the eyes inlaid with crystal. This crystal white of the "eyes" brings stage effects of reality to *Saisōrō*, an actual human being, and symbolically shows this dance's specialty among Bugaku dance music.



【図1】舞楽「採桑老」(平成26年四天王寺「篝の舞楽」より)、四天王寺提供(以下同)

舞楽「採桑老」【図1】は、齢を 重ねて死を目前としている百済国の 採桑翁が、長寿の妙薬といわれる桑 葉を求めて山野をさまよい歩く姿を 表現した舞といわれる。老相の面に 牟子 (頭巾)をつけ、白い直衣に身 を包み、手には鳩杖、腰には薬袋 を下げた舞人が、懸人(介添者)の肩 を借りながらそろりそろりと舞台へ と向かう。この舞は唐楽(左舞)の 一人舞であるが、「蘭陵王」「還城 楽」など勇壮な走舞や「萬歳楽」 「承和楽」など優美で華やかな楽曲 の多い左舞のなかにあって、飾り気 のない白い装束、足を擦りながらの 舞姿など、他の曲にはない緊張感の 漂う独特の雰囲気を醸し出す。その モチーフから老齢の舞人によって舞

われ、いつの頃からか「この曲を舞った舞人は程なくして死を迎える」 とも噂された秘曲である。

舞楽とは、雅楽の演奏に合わせて舞う舞踊で、わが国で最も古い伝統をもつ芸能である。雅楽・舞楽を演奏する楽人集団を「楽所」といい、宮中の大内楽所、興福寺を拠点とした南都楽所、そして四天王寺の天王寺楽所が、「三方楽所」として古くより宮中や寺社での奏楽を担って古くよりに舞楽の「舞」は、曲によって継承する「家」が決まっており、父子相伝の形で伝えられてきた。

舞楽「採桑老」は南都の多家において相伝されていたが、康和2(1100)年に、唯一の継承者であった多管恵父子が、この舞の伝承をめ

舞楽「採桑老」に用いられる面は 老人を表した独特のもので、舞われ る機会が少ないという事情からか面 の現存作例は少ない。最も古い作例 は奈良・手向山八幡宮伝来面で、顎 を欠くものの平安時代に溯る。面部 の皺はほとんど表されない一方、動 眼の目の周りには皺が刻まれており、 目元から老齢の相を表現する。これ に続くのが広島・厳島神社伝来面で、 鎌倉時代の制作とみられる。同じく 動眼・切顎の技法を用い、顔全体に 皺の曲線を幾重にも刻むとともに、 乱杭歯によって老齢の表情を生々し く表す。この基本的な形式が以降の 採桑老面にも採用されており、厳島

神社面がひとつの祖型といえる。こ のほか室町時代に溯るとみられる東 京国立博物館所蔵面と、これとほぼ 同系統の近世の面が奈良・春日大社 や兵庫・大避神社などに伝わってお り、中世以降の採桑老面の一定型と して定着したようである。また春日 大社には、これとは別に寛文9年 (1669) に後水尾法皇より寄進され た「天下一越前」の烙印を伴う採桑 老面が伝来し、これと同作とみられ る面が四天王寺にも伝わる【図2】。 春日大社・四天王寺両面は、眼の見 開きを抑え、乱杭歯の乱れた表現も おとなしくなり、洗練された印象を 与える面となっている。

採桑老面における技法上の大きな 特徴は、白目部分に水晶を嵌入す る点にある【図3】。これは東京国 立博物館面以降にみられる特徴で、 仏像の玉眼の技法を応用したものと 思われるが、他の舞楽面にはみられ ない採桑老面独特のものである。す でに厳島神社面には、目尻と目頭に 朱を差す表現に加え、睫を墨書きす ることなどの写実的な表現が指摘さ れているが、水晶の嵌入はそれをよ り強調する技法といえる。

採桑老面の水晶の眼は、舞に応じ て時折光を反射して老人のうるんだ 瞳を表現する。乱杭歯をのぞかせた 半開きの口とうるんだ瞳、足を上げ ずに重そうに擦りながら舞い、さら に天王寺楽人による舞においては、 袖で鼻をかむ様をあらわす「鼻ヲカ ム手 という具体的な舞振りが付け 加えられ、より生々しい人間の「老 い」の姿が描写される。またこの舞 のさなかには、舞人が「三十にして 情まさに盛んなり。四十にして気力 微なり。五十にして衰老に至り、六 十にして行歩官しきも、七十にして 杖に懸りて立つ。八十にして座すこ と巍々たりて、九十にして重き病を 得、百歳にして死すること疑いな し。」と詠じる。「採桑老」は長寿を 祝す舞ともいわれるが、この詠から は長寿への歓びは感じられず、むし ろ「老い」の自覚と「死」に対峙す る老翁の心情が吐露される。しかし この舞では、それでもなお生きなが らえるために、妙薬を探してさまよ う老翁の姿が表現される。舞楽「採 桑老 | が表現するのは、「死 | に怯 え、「老い」に苦しみ、「生」に執着 する一人の生身の人間の姿なのであ

この水晶の"眼"は、単なる装飾 的な技法にとどまらず、生身の人間 である採桑翁の実在感を演出する効 果をもたらしている。その技法の採 用は、舞楽の楽曲におけるこの舞の 特殊性を象徴的に示しているといえ るだろう。 (大和文華館学芸員)



【図2】舞楽面「採桑老」、江戸時代、四天王寺蔵



【図3】舞楽面「採桑老」部分

Collector's Stock of Knowledge]

Approach Toward Osaka Art World

Akeo Keizō

(Professor of Osaka University of Commerce; Chief Curator of Museum of Commercial History, Osaka University of Commerce)

Although the Osaka art world has recently become a little known to the public, it is really strange that its artworks before the war are still not evaluated and recognized enough art-historically. This article discusses the approach toward the Osaka art world from local museums and universities.

近年、京都と大阪で大規模展が続いたことにより、あまり顧みられることのなかった大阪画壇も少しは世間に知られるようになった。

もとより知られざる存在ではなく、 多くの作品が大阪を中心に残っているにも関わらず、美術史的な認知度 の低さは誠に不思議なことと言わざるを得ない。ここでは地域ミュージ アムと大学に籍を置く者として、コレクションとの関わりから考えてみたい。

約20年間にわたり芦屋市立美術博物館に歴史担当(近世近代文化史)として勤務したが、最後の5年間は市直営の業務受託者として予算規模と人員を削減されるなかで学芸課長を務めた。具体作品や小出楢重(1887~1931)に関しては美術担当に委ね、自身が市内の悉皆調査でよく目にした大阪画壇をもとに展覧会を立ち上げたいと思うようになった。

そもそも芦屋は西国街道に沿った 小村に過ぎなかったが明治以降の都 市間連絡鉄道の発達により、特に戦 後は大阪の富裕層の流入によって日 本屈指の高級住宅街となった。戦時 中の空襲で大阪市内は甚大な被害を 被ったが、その後背地である摂河泉 地域に生活文化資料が残り、谷崎潤 一郎(1886~1965)の『細雪』に見 られるような大阪船場の暮らし向き とともに彼らがパトロンとなって庇 護した大阪画壇の作品が芦屋市内各 所で確認された。

1990年代にはバブル崩壊と阪神淡路大震災にともない、事業予算が凍結もしくは縮小化した阪神間のミュージアムが埋もれた地域コレクションの活用を模索し始めた。前職の芦屋市立美術博物館を含め、堺市博物館や池田市立歴史民俗資料館、伊丹市立美術館、枚方市民ギャラリーなどで大阪画壇の展覧会が相次いで開



【図1】谷岡記念館(2・3階に商業史博物館)外観、筆者撮影

催されたのは必然的な流れであった かもしれない。

その後、大阪商業大学に転籍した 私は商業史博物館【図1】で展覧会 事業に携わることになる。当館は、 本学の教育と研究に寄与することは もちろん、商業史、郷土史に関する 資料の収集、調査、展覧会を実施し、 併せて地域の方々の理解と認識を深 める場を提供することを目的として いる。コレクションとしては佐古慶 三 (1898~1989) 文書 (希有文庫= 近世船場地域を中心とした町方文 書)・中谷作治 (1917~2011) コレ クション(明治初頭の新聞をはじめ、 新聞号外、博覧会資料) · 河内木綿 コレクション (縞帳・反物・織機)を 中心に地域学の拠点を目指している。

着任時に商業史の一環として新た に大阪画壇の調査研究を提案した。 何故なら天下の台所と呼ばれた近世 大阪は、全国の富が集積するだけで はなく、文雅を楽しむ洗練された文 化都市でもあったからだ。その意味

で、大阪町人自らが文雅趣味(書 画)をもつ文化人であることも多く、 さらに画家・俳人等のパトロンの役 割を果たしたのも町人であったこと から、文化の視覚的確認という意味 においても大阪画壇研究の意義は大 きいと思ったからだ。併せて当該作 品の収集は、大阪文化の貴重な研究 対象として、本学所蔵の佐古慶三文 書【図2】の活用と合わせ、町人文 化の研究拠点として位置づけられる ことにも繋がっていく。近時、収集 予算が凍結されたミュージアム(在 阪) が多い中で、少額とは言え継続 して予算が付いているのは誠に有難 いことと言わねばならない。

本学で実施した展覧会は平成24年の『近世浪華の町人と文人趣味』以降、『花外楼~老舗料亭の一品~』(平成25年)、『浪花慕情一菅楯彦とその世界一』(平成25年)、『北野恒富と中河内~知られざる大阪画壇の発信源~』(平成27年)【図3】、『なにわ風情を満喫しませう~大阪四条

明尾圭造

(図2) [広島藩大坂蔵屋敷図の舟入図拡大] 廖応2年 (1866)、紙本着彩215.2×124.5 cm、商業史博物

[図2]「広島藩大坂蔵屋敷図の舟入図拡大」慶応2年(1866)、紙本着彩215.2×124.5 cm、商業史博物館蔵(佐古慶三古文書)



【図3】北野恒富「井原西鶴像」、絹本着彩、商業史博物館蔵

派の系譜~』(平成29年)の5回 (いずれも図録有)を数えるが、毎回、企画に連動する形で連続講座、 シンポジウムを開催し商業史博物館 紀要によって事業の総括が行われて いる。

前職のころ新聞社の巡回展や買取 企画に忙殺されることなく自主企画 に専念できたことに感謝しているが、 指定管理の荒波に揺れた5年間は、 費用対効果と観客動員のことが頭か ら離れなかった。地域ミュージアム の存在意義を考えれば、守るべき骨 子(地域文化)のために動員企画を 実施するのは構わないが、それだけ では地域文化を守ることには繋がら ないし、学芸員の職域が危うくなる ことを意識しておく必要があるだろ う。重要なことは運営していく上で の優先順位とバランス感覚ではない かと思う。

一方で、動員を命題としない大学 ミュージアムは、せっかくの蓄積が 学内教育と研究者対応に偏重するあ まり学外に対して積極的に発信展開 してこなかった経緯がある。全国的 に開かれた大学が標榜されて久しいが、学外関係者や地域連携の拠点として大学設置のミュージアムはますます重要になってこよう。

地域と大学ミュージアムにおいて 大阪画壇を切り口として事業企画に 取り組んできた。事業承認は必ずし も容易なことではなかったが、諦め ずに続けて来られたのは大阪画壇に 対するやむに止まれぬパッションが あったからに他ならない。

(大阪商業大学教授·商業史博物館 主席学芸員)

Rethinking Suda その後の須田国太郎 Kunitarō

ルイス・デ・モラーレス への**眼差し** 坂本龍太

Gaze on Luis de Morales

Sakamoto Ryūta (Curator of Mie Prefectural Art Museum)

Suda Kunitarō regarded Luis de Morales (ca. 1510-1586) as the most typical Spanish painter. This article discusses Suda's gaze on Morales, whom he once copied at the Prado Museum, based on the trend of reevaluation of Morales at that time.

モラレスは西班牙的なるものを最も強く深くあらわし得た画家である。その意味に於いて真の郷土画家と云うべきである。我々はこの西班牙的なるものを把握すること無しに、西班牙絵画を理解することは出来ない[註1]。

1919年にヨーロッパに渡った須田国太郎(1891-1961)は、「最大の希望」であったプラド美術館の見学を果たし、巨匠達の絵画の模写に勤しむ [註2]。スペイン人作家の作品に関して言えば、エル・グレコやゴヤの作品を始め、ルイス・デ・モラーレス(1510頃-1586)の作品も一点のみ含まれる。須田がスペイン的なものを見出したのが、このモラーレスであった。冒頭の引用は1933年に須田が執筆した論文「絵画に於ける西班牙的なるもの一特にルイス・デ・モラレスを通して一」の一節である。モラーレスは、当時はもとより、現在もなお日本ではほとんど知られていない画家であるが、須田はなぜこの画家に目を向けたのか。本稿では須田の向けたモラーレスへの眼差しを探りたい。

ルイス・デ・モラーレスは1510年頃にエストレマドゥーラ地方のバダホスで生まれたとされる。「神のごときモラーレス (el Divino Morales)」という通り名で知られる。精緻な描写や、卓越した明暗表現、特にスフマー

トによる柔らかい陰影によって、キリストや聖母マリアの姿が暗闇から浮かび上がるように描かれたその作品は、深遠な精神性を湛える。細密描写にはフランドル、明暗表現にはイタリアからの影響が指摘されるが、画家としての形成については不明な点が多い。現在はバダホスに工房を構える前に活動をしていたプラセンシアで画家として形成し、同地でフランドルとイタリアの表現様式を受容したことが指摘される[註3]。1539年にバダホスに工房を構えて以降は、同地で没するまで貴族や高位聖職者達の依頼に応えた。

「神のごときモラーレス」という通り名は早くから知られていたものの、時とともに忘却の淵に沈み、モラーレスの再評価が本格的に始まるのは20世紀の初頭であった。この時期、エル・グレコやフランシスコ・デ・スルバランといった画家の作品が、「神秘的」あるいは「禁欲的」といった修飾語とともに注目を集める。彼らはスペイン的な宗教精神を表現する画家として再評価されたが、モラーレスもその一員に加えられたのである。プラド美術館では、1902年にエル・グレコ、1905年にスルバランの展覧会が開催され、遅れること12年、1917年に「神のごときモラーレス」展が開催された。

同展の図録では、モラーレスの明暗表現と精緻な描写 が紹介されるとともに、何よりスペインの宗教的精神性



須田国太郎《モラーレス作「聖母子」模写》1922年、京都国立近代美術館蔵 (出典:「須田国太郎画集」京都新聞社、1992年)

を表現した画家という側面が強調された。また、「ロマ ン主義的な熱情に満ちた、我らの禁欲主義をこれほどよ く表す作家を他に見出すことはない」とし、「彼の手が けた禁欲的な人物像に我々は当時の精神的感受性を見出 す」と評されている[註4]。そして、エル・グレコや スルバラン、ベラスケス、そしてゴヤ以上に「完璧に 人々の精神を捉え、それを絵筆によって永遠のものにし た と結論づけられている [註5]。

須田がスペインに滞在していたのは、まさにモラーレ スの再評価が盛り上がりを見せていた時期であった。マ ドリードに到着したのは1919年であるから、展覧会を訪 れることはなかったが、この気運を鋭敏に感じ取ってい たことは後年の言説からもうかがえる [註6]。模写を 行ったことも故なきことと言えよう。この時選んだ作品 は、須田がモラーレスの「最大傑作」と見做していた 《聖母子》(現在は「授乳の聖母」として知られる) であ

模写において聖母の衣服の襞まで丹念に描き写してい ることからもうかがえるように、須田は同時代のモラー レス評と同様、作中に見られるフランドル由来の精緻な 技巧とイタリア由来の明暗表現に目を向けている[註 7]。ただし、須田はむしろこれらの表現を通して見ら れるイタリアとフランドルという二つの芸術潮流の融合

を強調し、「今やこの伊太利的なるもの が、フランドル的なるものと不離の関係 に結ばれて了った[註8]。」と語る。モ ラーレスに見られる二つの異なる芸術潮 流の融合は、東西の絵画の綜合を大きな テーマとした須田に示唆を与えるもので あったことであろう。

その上で、フランドルやイタリアとは 異なるスペイン的なものへと目を移す。 須田は聖母の表情にそれを見出した。

> 聖母の表情はその熱意と感情の尖鋭 なる点に於いて、清浄円満なるラフ アエルの聖母子像と大なる対比をな している。少くもモラレスの聖母の もつ強き特質は、フランドルにも、 伊太利にも、これを見出し得ないも のである。我々は只に黒き西班牙を 感ずるのみである[註9]。

憂いを帯びた聖母の表情に宗教的な熱 情を見出し、これをスペイン的なものと 捉える点は、同時代のモラーレス評と軌 を一にするものである。一方、引用の最 後の一文で、須田がモラーレス作品の 「黒」にスペインを感じ取っている点は 注目に値する。須田は別箇所でもしばし ば、「暗黒」や「無限の黒」といった言 葉を使っており、「スルバラン、ベラス ケス、ゴヤを見よ。この単調に強きパ シオンを西班牙画家は感じる」として、

スペイン美術における「黒」の重要性を強調している [註10]。こうした点は、画業において「黒」の扱いに苦 闘した須田らしい観点と言えよう [註11]。

須田がモラーレス芸術に見出したイタリアの表現様式 とフランドルの技巧の調和、すなわち二つの異なる芸術 潮流の融合、そして「黒」という色彩、これらは須田の 画業における重要なテーマと連関する。 1点のみではあ るもののモラーレス作品の模写が須田にとって意義深い 経験であったことは間違いないであろう。

(三重県立美術館学芸員)

- [註1] 須田国太郎 「絵画に於ける西班牙的なるもの―特にルイス・デ・モラレ スを通して―」(『中央美術』第2号、1933年9月号)、須田国太郎『近代
- 絵画とレアリスム』新装版、中央公論美術出版、1978年、172頁。 [註2] 記録で確認されるその数は14点に上る。大高保二郎「プラド美術館での 模写画家 須田国太郎」『美術フォーラム21』、第43号、2021年、119-123
- [註3] Leticia Ruiz Gómez "Luis de Morales: Divino y humano, "El Divino Morales (cat. exp.), Madrid, Museo Nacional del Prado, 2015, p.39.
- [註4] Exposición de obras de Divino Morales (cat. exp.), Madrid, Museo Nacional del Prado, 1917, p. 5.
- [註5] Ibid. p. 6. [註6] 註1前揭論文、163頁
- 「註 7] 註 1 前掲論文、170頁。
- [註8] 註1前揭論文、170頁。 [註9] 註1前揭論文、170頁。
- [註10] 註 1 前掲論文、171頁。
- [註11] 須田の芸術におけるスペインの「黒」の重要性については以下の論稿に て改めて提起されている。橋 秀文「須田国太郎にとってのスペイン」 『美術フォーラム21』、第43号、2021年、108-112頁。

Overseas Correspondence

大英博物館 特別展示:京と大坂一都市の華やぎとサロン文化 1770年~1900年

エリス・ティニオス (リーズ大学名誉講師)







【図1~図3】大英博物館「京と大坂―都市の華やきとサロン文化 1770年~1900年」展会場風景

ヨーロッパや北米の博物館の日本ギャラリーの 入館者はたいてい浮世絵版画や甲冑を見ようとやって来る。あるいは茶碗や根付、あるいは仏像が 目当ての人もいるであろう。北斎の「神奈川沖浪 裏」が常設展示でないことにがっかりする人は少なくない。この版画が一枚展示されると、「なんて小さいんだ!」と驚く声がよく聞かれる。円山四条派や琳派をはじめとする近世日本の画家による華麗で多彩な作品は、大方の来館者にはほとんど、あるいは全く知られていない。

大英博物館の日本ギャラリーではこれから一年間、入念に企画された「特別展示」を行い、入館者の日本美術の理解を広げる機会を提供する。甲冑や仏像は引き続き展示されるが、「神奈川沖浪裏」や江戸時代の浮世絵は見られない。その代わりに、18世紀後半から19世紀の上方で花開いたサロン文化の活気あふれる世界が、ギャラリー空間の三分の二近くを占める。展示作品はすべて大英博物館の所蔵品であり、その内容は、大型の屛風、親しみやすい扇面画、掛幅、絵巻、絵本、大判の摺物、漆器、陶磁器など多岐にわたる。これらの作品はあまり知られていない様式で意外な題材を表しており、その多くが大英博物館の初出陳作品である。特別展示の内容は壁面パネルによって予めこのように説明される:

これらの都市 [京都や大坂など] において 人々は、専門家も愛好家も、詩歌、絵画、音 曲から園芸、茶道にいたる趣味にいそしむ目 的で集いました。こうした文化的な空間、あ るいは「サロン」の内部では、公の階級の区 別はさておき、人々は対等に協りしたの です。この精神は1700年代後半以降の日本 社会で文化が活気づく礎となりました。

このサロン文化の担い手が創造し、享受した芸術からすぐ見て取れるのは、強い好奇心と遊び心である。専門家も愛好家も等しく、中国やヨーロッパから入ってきた美術品や工芸品に興味津々であった。博物学もまた彼らの興味をそそった。自

分自身の世界、すなわち、自分たちが今ここで営む暮らしにも大きな関心を寄せた。こうした関心は山口素絢の『倭人物画譜』、当時の出版界の隆盛を物語る複数巻からなる名所図会のような書籍、河村文鳳が京都の相撲を生き生きと描いた絵巻といった絵画作品にも現れている。この特別展示で見られる画家には他に、池大雅と玉瀾、紀竹堂、岸岱、松村景文、上田公長、大石真虎、森寛斎、呉春、円山応挙などがある。彼らの多様な作品は、画家が生活し、創作していた文化ネットワークの内に確かな位置を占めている。

この特別展示は、ロンドン大学、京都国立近代美術館、立命館大学、関西大学、大英博物館の研究者を主とした国際共同研究プロジェクト「上方文化サロンとネットワーク 1780年~1880年」の成果である。ESRC (Economic and Social Research Council) を通じ UKRI (UK Research and Innovation) から、また日本学術振興会ときょうと視覚文化振興財団から助成を受けており、国際学術協力の重要な一例である。展示と時を同じくして、豊富な図版入りの出版物 Salon culture in Japan: making art, 1750-1900 (矢野明子編) が大英博物館出版部から刊行された。(川上幸子訳)

British Museum Special Display: City life and salon culture in Kyoto and Osaka, 1770-1900

Dr. Ellis TINIOS (Honorary lecturer of University of Leeds)

The British Museum has mounted a special display devoted to 'salon culture' in Kamigata in the late 18th and 19th centuries. All the objects shown come from the Museum's own holdings: screens, fans, hanging scrolls, hand scrolls, illustrated books, surimono, lacquers, and ceramics. Many are displayed for the first time.



本財団は、京都の洋画家・須田国太郎(1891-1961)のご遺族・須田寛氏から、その遺産を須田が目指した日本の美術振興にあててほしいとの申し出があり、2019年11月に美術研究者を中心に発足したものです。2022年8月には公益財団法人に移行し、機関誌の発行、調査研究に基づく『美術フォーラム21』の刊行、連続講座やワークショップの開催、展覧会支援、展覧会企画などの活動を行っています。

学術誌『美術フォーラム21』最新刊のご案内 購読をお勧めします。



第48号

- A 4 判・並製本・カラー 8 頁・モノクロ112頁 ■定価2,530円(税込)■2023年12月発行
- ISBN978-4-925185-78-3 C1370



第49号

- ■A4判・並製本・カラー8頁・モノクロ104頁
- ■定価2,530円(税込) ■2024年6月発行
- ISBN978-4-925185-79-0 C1370

資料紹介 野際白雪筆「学黄鶴山樵山水図小襖」(和歌山県立博物館蔵) / 安永拓世 現代作家紹介 うらあやか――遊び的振る舞いをともなう身体・行為・観客/吉田絵美

特集 東アジア文人画の「近代」/河野道房編集

東アジアにおける近現代の精神文化を、宋代 (960~1279年) 以後に展開した文人・文人画の 価値観から問い直します。

- 1 『列朝詩集小傳』に見られる「文人」の諸相/大平桂一
- 2 文人画の造形と鑑賞――筆致・点景・空間を中心に/竹浪 遠
- 3 文人画家としての蘇軾と、後世における彼の文人画思想への誤解/衣若芬(前田佳那訳)
- 4 十四世紀の日本人画僧と文人文化/森 道彦
- 一韓抄の絵画観/宇佐美文理
- 6 彭城百川の画業における俳諧の意義/筒井忠仁
- 7 高麗時代から朝鮮初期までの文人画――墨竹を中心に/朴 株顯
- 8 《亦復一楽帖》をめぐる或る茶会――大正文人たちの幕末への追想/竹嶋康平
- 9 長尾雨山と内藤湖南の中国書画観――林平造 (号蔚堂) の収集品をめぐって/呉 孟晋
- 10 洋画家の文人画家的傾向---須田国太郎の場合/河野道房
- 11 光を失っても藝術は可能か――汪士慎/長谷川沼田居と身体的欠失(盲者)の文人画/ 塚本麿充
- 12 日本近代文人画略史――多様な表現者と活動をめぐって/村田隆志
- 13 川端康成の文学における心画――「心を写す」「意に適う」から「品を求める」へ/

周 閱(根來孝明訳)

書評 藤原貞朗著『共和国の美術――フランス美術史編纂と保守/学芸員の時代』/永井隆則 表紙解説 表 郭男《幽篁枯木図》京都国立博物館蔵/河野道房

裏 川口茜漣《八木重吉のうた》個人蔵/土田真紀

執筆者紹介/英文要約 (キャロル・モーランド訳)

資料紹介 《ロシア風俗画》(京都大学大学院文学研究科図書館所蔵) / 筒井忠仁

第18回パラミタ陶芸大賞展 出品作家紹介/衣斐唯子

現代作家紹介 ユリア・クリヴィチ 予兆と多重性/加須屋明子

特集 像の論理/井面信行編集

媒体上に展開された「像の論理」の理解を通してその認識=意味を追求します。

- 1 像の論理――絵金・赤岡本《伽羅先代萩 御殿》に即して/井面信行
- 2 ジョルジュ・ディディ=ユベルマンにおける「感性的なものの分有」
 - ――「蜂起」展(2016年)をめぐる議論を軸とした一考察/松井裕美
- 3 絵巻作品における絵の論理――《後三年合戦絵巻》を事例として/苫名 悠
- 4 影向図試論――聖なる者を観るのは誰か?/加須屋 誠
- 5 像とその解釈 イメージ研究の行方/加藤哲弘
- 6 「イメージの力」展 再訪・再考/吉田憲司
- 7 フラ・アンジェリコと無形象――サン・マルコ修道院ドルミトリオの白と闇/水野千依
- 8 メタメディウム的イコンとしてのジョット作《オンニッサンティの聖母》/松原知生
- 9 彫刻を見る困難について――カノーヴァをめぐって/金井 直
- 10 絵を描いてつくるアニメーションの像と運動/時間/今井隆介
- 11 舞の論理――上方舞・山村流/山村 侃
- 12 平安神宮神苑を再構成する――フィールドワークから庭のかたちを探る/山内朋樹

表紙解説 表 絵金《伽羅先代萩 御殿》/中西洸太朗

裏 服部しほり《立てば芍薬》/田島達也

執筆者紹介/英文要約 (キャロル・モーランド訳)

発 行:公益財団法人きょうと視覚文化振興財団

販売 (委託): 醍醐書房 TEL: 080-6472-9458 FAX: 050-3588-4276 E-mail: daigoshobou@gmail.com

|2024年度事業として、視覚文化連続講座シリーズ 5 「視覚文化の不易流行|(全 8 回)を開講します。

陶芸や絵画、能楽、舞踊、香道などの領域で、変わらないものと変わるものについて考えてみます。



1 2024年9月21日(十)

「匂いを見る、香りを聞く~香道から」

和歌にみる匂い・香り/源氏物語と匂い・香り/香木と銘/ 伝統文化プロデュースの現場から

濱崎加奈子(京都府立大学准教授 (公財)有斐斎弘道館館長) 京都大学文学部哲学科卒業、東京大学大学院総合文化研究科後 期博士課程修了、学術博士。著書に『京都かがみ』『香道の美 学』、共著に『京菓子と琳派』、監修に『京都二条城と寛永文 化したど



5 2025年 1 月18日 (土)

「近世工芸とビジュアル・アーカイブ 一乾山焼を中心に」

尾形乾山の芸術/琳派風の図案と光琳/乾山の絵画・織物・漆器・絵本/乾山の独自性と近世の視覚性

リチャード・ウィルソン (国際基督教大学名誉教授)

ユーヨーク生まれ。カンサス大学美術史学博士。作陶家。 1993~2019年国際基督教大学美術・考古学分野の准教 授、教授、特任教授を歴任。2021年小山富士夫記念賞褒 賞受賞。著書に『尾形乾山 研究集成』ほか多数。



2 2024年10月19日(土)

「陶芸に親しむ

--パラミタ陶芸大賞展のこれまでとこれから」

陶芸展のあゆみ/伝統とオブジェ/陶芸の多様性

衣斐唯子(〔公財〕岡田文化財団パラミタミュージアム学芸員)

1979年三重県生まれ。2009年より現職。三重県の伝統工芸品である萬古焼の調査・研究を行うかたわら、パラミタ陶芸大賞展、河井寛次郎展、浮世絵展などを担当。



6 2025年 2 月15日 (土)

「高畠華宵のイマジュリィ世界」

高畠華宵の生涯/作品世界とその特徴/大正文化の中での 華宵/華宵の水脈を探る(アングラからサブカルへ)

高畠麻子(高畠華宵大正ロマン館館長)

1967年愛媛県生まれ。成城大学文芸学部芸術学科卒業。 1990年の開館時より学芸員として同館に勤務。大正イマジュリィ学会常任委員・事務局。著書に『華宵からの手紙』『高畠華宵一大正のロマンとデカダンス』(監修)など。



③2024年11月16日(土)

「身体の共鳴とコンテンポラリーダンス」

身体表現の多様化と歴史/ニブロールがしてきたこと/ 身体と共鳴、共存するとは一折り紙を使って

矢内原美邦 (近畿大学文芸学部教授)

舞踊学を専攻。在学中に、アメリカンエデュケーション振付特別芸術賞受賞。1997年ダンス・カンパニーニブロールを結成、1906日津田國土戯曲賞受賞。ダンスと演劇、美術などの領域を行き交いながら作品制作を行う。



4 2024年12月21日 (十)

「流行りつつある大阪画壇一残された美術史の沃野」

そもそも売れていた大阪画壇/江戸期における自娯の感覚/ 大阪特有の絵画受容について/欧米からの逆輸入

明尾幸造(大阪商業大学教授・商業史博物館主席学芸員)

1961年布施市生まれ。日本近世近代文化史専攻、大阪画壇を研究。芦屋市立美術博物館学芸課長を経て現職。文化交渉学博士。共著書『モダニズム出版社の光伯』(淡交社)ほか多数。



7 2025年 3 月15日 (土)

「能と能面」

能の歴史の中での変化と不変/能役者の舞台上での精神/ 能面に見る能の心

金剛龍謹 (金剛流能楽師 〔公財〕金剛能楽堂財団理事)

1988年京都生まれ。金剛流二十六世宗家金剛永謹の長男。 父・永謹、祖父・二世藤に師事。龍門之会主宰。同志社大 学文学部卒業。京都市立芸術大学非常勤講師。2023年京 都府文化賞奨励賞受賞。



图 2025年 4 月19日 (土)

「上方舞山村流―座敷舞、地唄舞の魅力」

上方舞山村流の歴史と現在/山村流の地唄舞/ 山村流の歌舞伎舞踊

山村侃 (上方舞山村流舞踊家)

1992年大阪生まれ。山村流宗家の次男。父の六世宗家山村若襲名披露舞踊会にて初舞台。山村流宗家一門の会『舞 扇会』に出演、2022年宝塚歌劇『心中・恋の大和路』 (振付)で文化庁芸術祭賞優秀賞受賞。

〔開講時間〕14:00~15:30

〔会 場〕同志社大学今出川校地寧静館 N21 教室 京都市上京区今出川通烏丸東入

〔定 員〕100名(随時受付)

[受講料]全8回8,000円(税込)『須田記念視覚の現場』2冊(春季号と秋季号)進呈

※通年受講者とは別に、1回毎の聴講者を受け付けます。1講座(税込1,200円)のみをご希望の方は、事務局までお問合せください。

〔主 催〕公益財団法人きょうと視覚文化振興財団

〔受講申し込み〕財団ホームページに記載の「受講申し込みフォーム」に必要事項を記入のうえ送信してください。

2024年度に開催予定の次の展覧会を支援します。

- ① アトリエみつしま企画展「まなざしのモメント」 会場:アトリエみつしま(京都) 会期:2024年9月29日~10月31日(予定) 出品作家:ロビン・オウィングス、大谷重司、光島貴之、石原友明、かつふじたまこ 企画:光島貴之
- ②「知覚する風景(仮)」展 会場:2kw ギャラリー(滋賀) 会期:2024年11月6日~12月1日(予定) 企画:谷内春子

3種類の会員を募集しています。ご希望の会員の種類を明記の上、財団 HP の「会員申込フォーム」を事務局にお送りください。

なお、すべての会員に、展覧会、連続講座、講演会、ワークショップなどについての情報をメールでお知らせします。

- ② 友の会会員 視覚文化について知見を拡げ、深めようとする個人の方──年会費: 2,000円 (4月~翌3月)
 - 特典1)機関誌『須田記念 視覚の現場』(オールカラー B 5 判16頁)を半年に1冊ずつ、年間2冊お送りします。 特典2)連続講座全8回の内ご希望の1回分の無料聴講券をお送りします。ただし、ご希望の回を事前にご連絡ください。
- ③ フォーラム会員 美術を中心とする視覚文化を研究しようとする個人・法人の方──年会費:5,000円(4月~翌3月)
 - 特典1)『美術フォーラム21』を半年に1冊ずつ、年間2冊お送りします。
 - 特典2)機関誌『須田記念 視覚の現場』を半年に1冊ずつ、年間2冊お送りします。
- 特別会員 美術を中心とする視覚文化を振興する財団の活動を応援しようとする個人・法人の方──年会費: 20,000円 (4月~翌3月)
 - 特典1)機関誌『須田記念 視覚の現場』を半年に20冊ずつ、年間40冊お送りします。
 - 特典2)『美術フォーラム21』を半年に1冊ずつ、年間2冊お送りします。
 - 特典3)連続講座全8回の内ご希望の1回分の無料聴講券をお送りします。ただし、ご希望の回を事前にご連絡ください。

公益財団法人きょうと視覚文化振興財団 事務局

各種お問合せ

〒607-8154 京都市山科区東野門口町13-1-329 TEL: 075-748-8232 FAX: 075-320-2582 E-mail: info@kyoto-shikakubunka.com HP: https://kyoto-shikakubunka.com



表表紙

板谷龍一郎 (1971~)

《Monstera》 2019

Acrylic on MDF/30×30×30cm 個人蔵



裏表紙

市川其融(生没年未詳:江戸後期に活躍)

《四季草花図》江戸後期

絹本着色 85.6×54.2cm 個人蔵

編集後記

2024年7月5日 明尾圭造 (大阪商業大学教授・商業史博物館主席学芸員)

ある美術商で初めて板谷龍一郎(ベルリン在)の作品を見た。 梅雨時の蒸し暑い日で鮮やかな色調につい目が行った。作品自 体は店先に置かれて久しいが人の意識というのはいい加減なも のだ。本来、近世近代の日本書画を専門としつつ時代や領域に 左右されないこの店には多種多様な作品と来訪者が集結する。

本号の編集を仰せつかって表・裏表紙に掲載する作品を選定することになり出合頭で表紙に決めたのが本作品である。ホワイトキューブに凝縮されているのは中央アメリカの熱帯雨林に自生する観葉植物の「モンステラ」。ボップでモダンな色調は「街」「モノ」「自然」をモチーフに制作する板谷の真骨頂とも言うべき作品だろう。

さて、本作をベースに裏表紙に市川其融の「四季草花図」を 選んでみた。其融は江戸詰の下総国古河藩士で江戸琳派の鈴木 其一の門弟とされる。幕末に流行した博物図譜の影響が伺える 蜂や蜻蛉、蟷螂、蝶などの昆虫が点在する本図は如何にも長閑 である。ここでは紫陽花の葉に見る琳派のたらし込みや金泥に よる葉脈の鮮やかさと板谷の明確なアクリル骨線とを対比して みたが如何であろうか?

長年、小規模館で地域文化財や収蔵コレクションを中心に展覧会を企画してきたが、選定した作品は良くも悪くも私そのものだったと言えよう。大規模展でよく耳にする「目玉作品」や「展覧会のピン」という言葉が嫌でたまらない。人はもちろん、モノにも本来優劣の差などあろうはずは無く、それぞれに物語がある。何気なく心惹かれる作品に存在意義を見出し、飾り気なくその本質を伝えたい。ますます観客動員をベースとする企画からは遠ざかる一方だが、小たりと言えども自分の言葉で誠実に伝えていきたいと思う。

今回、柄にも無く現代アートと近世絵画のコラボレーション を試みたが、当初の懸念とは裏腹に意外に面白く、こうした機 会を得たことに改めて感謝したい。

わたしたちは、きょうと視覚文化振興財団を応援しています。

天野画廊 (大阪)

御池画廊 (京都)

画箋堂 (京都)

GALLERYGALLERY (京都)

ギャラリー恵風 (京都)

Gallery PARC (京都)

三条祇園画廊 (京都)

The Third Gallery Aya (大阪)

ギャラリー島田 (神戸)

集雅堂 (大阪)

ギャルリー正観堂 (京都)

大雅堂 (京都)

ギャラリー鉄斎堂 (京都)

白銅鞮画廊 (東京)

ギャラリーヒルゲート (京都)

表具と修復 藤枝春月 (大阪)

星野画廊 (京都)

ギャルリー宮脇 (京都)

山添天香堂 (京都)

ギャラリー祐英 (大阪)

